感染症の最新の研究や調査を視察

ノロウイルス研究の最前線

米国食品衛生調査団に参加して　下

食品検査課　中川　圭太

今回は、アトランタ、サンフランシスコの視察について報告する。

アトランタへは、ワシントンDCから飛行機で2時間かけて移動した。

アトランタは、米国の東南部に位置し、コカコーラ社、デルタ航空、CNN等の世界的な企業の本社があり、米国の商業中心都市の一つである。この地では、米国連邦機関の一つであるCDC(米国疾病予防管理センター)を視察した。

CDCは、米国の保健省の一つであり、感染症等の情報収集及びその対処方法について研究・開発を行っている機関である。前号で報告したFDA(米国食品安全医薬品安全局)と同様、入館手続きは非常に厳しく、パスポート提示、エックス線による荷物確認等のチェックを受けた。ここでは、米国の食中毒の最新の研究や統計状況の説明があった。特にノロウイルスは、日本と同様、米国でも大きな食中毒の原因となっているとのことで、最近の研究・調査の結果、ノロウイルスは2年周期で流行する傾向が判明し、これはウイルスの遺伝的変化に起因しているとのことである。

また、感染症の監視センターも見学できた。この監視センターは、十数メートルの巨大モニターと百台以上のパソコンにより、世界中のあらゆる感染症の状況がリアルタイムで確認できる。訪問時は、世界中のポリオウイルスの発生状況の監視を行っていた。

続いて、アトランタから飛行機で5時間かけ、米国西海岸のサンフランシスコに移動した。ここではドライフルーツの製造工場を視察した。この工場はHACCPシステムを導入しており、日本の大手商社と提携し、日本にも製品を輸出している。工場は広大な敷地に建設され、内部の動線も日本と比べかなり広く、効率的に製品が製造されていることが想像された。このことからも、米国の合理化への取り組みの一端を知ることができた。

今回、米国のHACCPや感染症の取り組み状況を視察できたことは、非常に有意義であった。調査団で得た知識や情報をもとに、一層の食の安全・安心に取り組んでいきたい。

(シリーズおわり)

HACCP(ハサップ/ハセップ)
(Hazard Analysis Critical Control Point)
食品の原料の受け入れから製造・出荷までのすべての工程において、危害の発生を防止するための重要ポイントを、継続的に監視・記録する衛生管理手法。

CDCの緊急時対応センター(上)、FDA前で集合写真(下)

---

⑪ さくらこぼればなし

見てよし、詠ってよし、食べてよし

薬としても利用されてきた「天の配剤」

ハルの語源は〈晴〉または〈発〉と言われ、「万物の発生」を意味している。木々は芽を吹き、花が咲き、小鳥がさえずり、天地自然がいきいきと春色を帯びてくる。手元の『大歳時記』春の部を開いて、美しいグラビアを眺めながら名句を口ずさんでいると、多くに、「俳句セラピー」の〈治療指針〉だ。

春は何と言っても桜花爛漫、日本人の心底には「桜の花」が在る。桜は見てよし、詠ってよし、食べてよしというだけ身、食あたり(食中毒)などの治療に用いられてきたのだ。桜皮を煎じて飲めば胃もたれや食中毒、咳止めに著効があり、その液を患部に塗ると、おできや湿疹、じんすさせてくれる。花びらには二日酔いをさます成分があるから「桜湯」なんて、ちょっと乙で優雅なものである。桜の香りといえば、やはり桜餅に使われる葉の何ともの季語や言葉が私の体内インデックスを瞬時に探り当て、過去の体験、思い出を引き出してくれる。それはまた〈癒し〉につながる歳時記効果なのかもしれない。まさではなく、昔から薬としても利用されてきたのである。桜の樹皮、特に山桜のそれは炎症を鎮める作用があって「桜皮」という生薬として解熱、咳止め、湿疹、腫れ、打ちましんの治療になる。

さらに、桜の葉を風呂に入れておくと、あせもに効果があるといわれている。桜の花びらや葉を散らした「桜風呂」は、心身ともにリラックして、食べてよしというだけなのである。

(太陽俳句会主宰　務中　昌己著『俳句セラピー』北溟社抜粋)

人間ドック　がん検診を知る

⑥ 大腸がん

食事の欧米化で増加傾向

便潜血陽性の方は大腸内視鏡検査を

がん検診についてのお話は、今回の大腸がん検診が最後です。

大腸がんは、食事の欧米化、特に動物性の脂肪や蛋白質の過剰摂取などで食物繊維の摂取量が減少したことにより、日本でも近年増加傾向にあります。日本人では直腸とS状結腸に多く発生します。毎年、約6万人が罹患し、頻度は男性、女性ともに60代が一番多く、70代、50代と続きます。特に、女性の大腸がんは平成15年に胃がんを上回って第1位となっています。

大腸がん検診は、便に血が混じっているかを調べる便潜血検査を行います。40歳以上の人は毎年受けることで、大腸がんによって死亡する確率を約60～80%減らせるという調査報告もあります。(出典:独立行政法人国立がん研究センターのリーフレット『大腸がん検診を受けましょう』)

便潜血検査にて陽性と判定された場合は、精密検査として大腸内視鏡検査を行います。検査日前日から当日にかけて、専用の下剤により大腸をきれいにしてから行います。内視鏡を肛門から一番奥の盲腸まで挿入後、抜去しながら粘膜面を観察し、炎症、潰瘍、がん、ポリープなどの病変の有無や広がりを確認します。

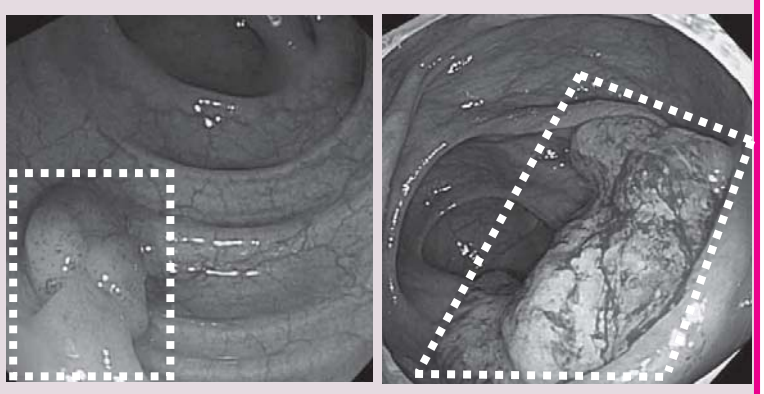
病変を認めた場合、悪性か良性かを調べるために病変の一部を採取して組織検査を行います。また、ポリープや早期のがんであれば内視鏡で切除することもできます。

大腸内視鏡検査は、「怖くてできない」と敬遠される方にも、鎮痛薬や鎮静薬を使用することで、検査の苦痛を軽減することができます。

大腸がん検診で便潜血陽性となった方は、是非、大腸内視鏡検査を受けましょう。

(ドック課　中村　和美)

(シリーズ終わり)



良性ポリープ(左)、大腸がん(右)